

北齊佛教界における梵語佛典の重視

佐藤 心岳

一

中國の佛教は、インドの佛教に比べてその性格を著しく異にしている。兩者の性格の相違は、端的にいえば、中國の佛教徒がひとえに漢譯佛典を重要視したということに由來する。かれらは漢譯佛典を特別に尊重して、それに基づいて佛教を理解し信奉したのである。中國に受容された佛教が著しく變容して中國佛教として独自の發展を遂げたことは、正しくこのような理由によるものである。中國における漢譯佛典の重視ということは顯著な事實であるが、ややもすればこの事實が強調されるために、その原典としての梵語或いは胡語の佛典が中國では實際にどのように取扱われ、またどのように評價されたかという問題は、全く影を潜めてしまつた。

しかしながら、これに關する見解が、次のように端的に表明される場合がある。すなわち中國の佛教徒の間では、漢譯佛典は極端に重視されたけれども、その原典としての梵語或

いは胡語の佛典は、漢譯佛典成立以後には全く無視されてしまつたという主張である。しかしこのような斷定はいささか早計の感を免かれぬ。中國佛教史上には、確かに佛教徒が漢譯佛典のみならず、梵語佛典を重視したという實例が存するのである。したがつて、ここでは梵語佛典重視という傾向が明確に認められる北齊佛教界における梵語佛典の重視という問題を検討してみようと思う。

二

北魏が西曆五三四年に東西兩魏に分裂して相對峙するに至ると、これまで北魏の佛教都市として繁榮を誇つた洛陽は、急速に衰微して行つた。當時、洛陽で多量の梵語佛典を抱えて佛典を翻譯していた有名な北インド僧菩提流支は、東魏の新都鄴（河南臨漳）に赴いたが、その後まもなく、洛陽は東西兩魏軍が爭奪する戰場となり、洛陽在住の多數の名僧學者も大學して東魏の首都鄴に移住した。ここにおいて東魏の國都

鄴は、北シナ佛教界を指導する教學の中心地として洛陽に取つて代つたのである。

それ故に、洛陽の多數の佛寺はこの時期に急激に減少した。北魏末期の洛陽には、一千三百六十七を數える佛寺が存在したが、それらの多數の佛寺も、孝靜帝の鄴遷都以後にはその約三分の一の四百二十一寺に減つたと傳えられている。當時、東魏の首都鄴には實際にどのくらいの佛寺が存在し、また洛陽からの遷都の結果として、佛寺がどれほど建立されたかということについての詳細は不明であるが、この時に鄴都における佛寺が豫想以上に増加したことだけは間違いない。

西曆六世紀後半になると、鄴は東魏に代つて北齊の首都となつていたが、北齊鄴都における佛教は隆盛を極めていた。そこには、ほぼ四千を數える佛寺が櫛比して、それらの佛寺に住する僧尼は殆んど八萬人にもおよび、講席は二百以上もあつて、それらの講席で聽講する者は常に一萬人を越えていたと傳えられている。そうして當時の北齊鄴都の佛教界では、佛教の研究講説が盛んに行われて、佛教界は空前の盛況に向つていた。

北齊の文宣帝は、このように隆盛を極める鄴都の佛教界において熱心に佛教を信奉していた。文宣帝は、熱烈な佛教信者であつたという點で梁の武帝に比せられるが、かれは、建寺・度僧・受戒・斷肉などをおこない、天保六年（五五五）に

は『廢李老道法詔』⁽⁴⁾を發布して、佛教の特に優れていることを承認している。このように佛教を積極的に保護し信奉した文宣帝は、また梵語佛典を極度に重視していた。これについて『續高僧傳』第二卷には次のように記されている。

宣帝、重法殊異、躬禮梵本、顧群臣曰、此乃三寶洪基、故我偏敬。⁽⁵⁾
この記述によると、文宣帝は、漢譯佛典以上にその原典としての梵語佛典を重視していたことが知られる。かれは、梵語佛典は三寶の洪基であるが故に、それを偏めに崇敬するのである、と群臣に向つて明言している。かれはもはや梵語佛典を單なる佛典としてではなく、禮拜の對象として尊重していたのである。ここでは梵語佛典の神聖性が特に強調されているが、漢譯佛典重視という傾向の強い中國佛教史上にこのような事實の存することは、まことに注目すべき事柄である。

その後、北齊末期（——五七七）の鄴都の佛教界は、佛寺の數も僧尼の數もさらに増大して驚くべき繁榮の絶頂に達していたと考えられる。當時、全盛を極める北齊鄴都の佛教界には、中國人でありながら、漢譯佛典よりもむしろその原典としての梵語佛典を重視した譯經沙門彦琛が活躍していたのである。

三

彦琛は、『續高僧傳』第二卷の譯經編に「隋東都上林園翻經

館沙門釋彥琮」として伝えられている。⁹⁾ 彥琮、姓は李氏、趙郡柏人（河北堯山）の人である。北齊の天保八年（五五七）から隋の大業六年（六一〇）に至る五十四年間北シナに生存していた。かれは、ただ譯經沙門としてのみならず、當代一流の知識人としても甚だ有名であつた。かれはまた『福田論』・『僧官論』など數多くの書物を著わしたが、しかしその著書の大部分は散逸して現存するものは極めて少ない。

北周の武帝は、建德六年（五五七）に北齊を滅ぼしてその都の鄴に入城して、北齊に全盛を極めていた佛教々團の廢毀を命じた。武帝による廢佛斷行の結果として、北齊の鄴都で活躍していた多數の僧徒は鄴を逃れて四散したけれども、彥琮はその才學を認められて長安に招かれ二十一歳の若さで通道觀學士となつた。かれは、宇文愷らの周代の朝賢とともに『易』や『老莊』の講論に列し、また王劼、辛德源、陸開明、唐怡らの名士と親しく交わり、上層社會における學問的な交遊に際しても、決して佛教を弘宣することを忘れなかつたと伝えられている。

隋の時代になると、佛教は長安を中心として徐々に復興し、これまで俗服を纏つて佛教の弘布に努めていた彥琮も、時の學匠曇延の勧めによつて二十五歳で剃髮僧に復歸した。そうしてかれは『辯教論』などを著わして、道教の妖妄を痛烈に批判するかたわら、當時西域から將來される佛典の翻譯に従

事していた。その後、大興善寺に住して翻譯を掌り、次いで煬帝の建てた日嚴寺に移つて佛教の弘通に盡力した。日嚴寺に住して佛教の宣布に熱情を傾けていた彥琮は、「東夏の貴ぶ所は、文頌を先となし、中天の師表は、梵音を本となす」ということを充分に自覺して、特に梵語佛典を重視して、それを毎日讀誦していた。これに關して『續高僧傳』第二卷には次のように述べられている。

東夏所貴、文頌爲先、中天師表、梵音爲本。琮乃專尋教典、日誦萬言、故、大品、法華、維摩、楞伽、攝論、十地等、皆親傳梵書、受持誦讀、每日闍闕、要周乃止。

ここに言及されている大品、法華、維摩、楞伽、攝論、十地などの梵語佛典は、彥琮よりも以前に中國に將來されてきたものばかりである。またそれらの漢譯佛典もすでに廣く中國各地に流布していた。ここで特に注目すべきことは、彥琮の時代にこの種の漢譯佛典がすでに流布し信奉されていたにも拘らず、それらの梵語原典がなお依然として中國で保存され讀誦されていたということである。

例えば、上述の梵語佛典のうちでも特に『維摩經』は、この時代までに鳩摩羅什譯を含めて六回も翻譯されていたが、この經典は北魏の佛教界では特に重視信奉されていた。北魏の宣武帝は、常に名僧學者を宮廷に集めてこの經典を講じていたと伝えられている。¹⁰⁾ この經典に説かれている維摩居士と

文殊菩薩との法論の場面は、山西省の雲岡の石窟に少からず刻まれており、また河南省の龍門の石窟にもその佛龕の入口の上部の意匠として最も多く刻まれている。このように『維摩經』の説く思想信仰が雲岡や龍門の石窟に具現されてからも、その梵語原典が中國の佛教徒によつて尊重されていたということは、特に注目すべきことであろう。

四

以上に検討した結果から明らかなように、北齊から隋時代にかけて北シナで活躍した譯經沙門彥琮は、中國における漢譯佛典の重視という傾向を批判して、その原典としての梵語佛典が非常に重要なものであるということを充分に認識していた。また熱烈な佛教信者であつた北齊の文宣帝は極度に梵語佛典を尊重していたが、同じ北齊の佛教界でその青年時代をすごし精根を傾けて佛教を研究した譯經沙門彥琮もやはり梵語佛典を重視していた。これらの事柄を併せ考えると、梵語佛典重視という傾向は、北齊佛教界において特に顯著であつたと言えるであろう。

なお以上、中國、殊に北齊佛教界における梵語佛典の重視という問題を端的に指摘して検討してみたのであるが、さらにこの問題を個々の文獻に當つて精細に検討するならば、われわれは、中國佛教史上に梵語佛典の重視という傾向が嚴然

として存していたという事實をより一層具體的に把握し理解することができらうと思ふ。

- 1 これに關する北魏の李廓の『衆經錄』の文が、隋の費長房の『歷代三寶紀』第九卷には「三藏法師房內、婆羅門經論本、可有萬甲、所翻經論筆受草本、滿一間屋。」（大正藏、四九卷、八六頁中）と記され、また唐の道宣の『續高僧傳』第一卷にもこれとほぼ同じ李廓の文が、「三藏法師流支房內、經論梵本、可有萬甲、所翻新文筆受草本、滿一間屋。」（大正藏、五〇卷、四二八頁下）と傳えられている。さらに道宣は『大唐內典錄』第四卷のうちにも「三藏法師房內、婆羅門經論本、可有萬夾、所翻經論筆受草本、滿一間屋。」（大正藏、五五卷、二六九頁中）という李廓の文を引用している。
- 2 『洛陽伽藍記』第五卷（大正藏、五一卷、一〇二二頁上）。
- 3 『續高僧傳』第十卷、靖崇傳（大正藏、五〇卷、五〇一頁中）。
- 4 『廣弘明集』第四卷（大正藏、五二卷、一一二頁下—一一三頁中）。
- 5 『續高僧傳』第二卷、那連耶舍傳（大正藏、五〇卷、四三二頁下）。
- 6 彥琮の傳は、『續高僧傳』第二卷（大正藏、五〇卷、四三六頁中—四三九頁下）のうちにかなり詳しく述べられている。
- 7 『續高僧傳』第二卷、彥琮傳（大正藏、五〇卷、四三七頁中）。
- 8 （永平二年十一月）帝於式乾殿、爲諸僧朝臣、講維摩經。（『魏書』世宗紀）。